

衣の系譜に関する研究

(第2報) 力士のまわしについて

古川 智恵子・中田 明美

Studies on the Genealogy of Clothes (2) On the "Sumo" Wrestlers' Loincloth

C. FURUKAWA and A. NAKATA

結 言

第1報では、禪の系譜や合理性、機能性について述べた。このような禪の性質を、仕事着として今日にほぼ純粹に引き継いでいる顕著な例が、角界の力士のまわしである。

本報では、力士のまわしが幾多の長い歴史を経て現在のものにどのように推移してきたのか、また、禪の呪術性がいかに受け継がれているか、それらの系譜について、調査研究する事を目的とした。

方 法

1. 調査期間 昭和58年3月～昭和59年9月
2. 調査対象 角界の力士のまわし
3. 調査方法

(1) 相撲博物館、百貨店、(株)大野屋、宮田刺繍舗、その他資料館、図書館において文献を調べ、資料を収集し、まわしについて探求した。

(2) 関取りを訪問し、力士まわしの形態、材質、寸法、構成、着装方法、更にその機能性について調査し、写真撮影を行う。尚、昭和初期までのまわし等については、相撲博物館所蔵の実物を撮影させて頂いた。

結果および考察

1. 力士のまわしの系譜

(1) 相撲の推移

相撲のまわしについて研究するには、まず相撲の歴史について調査しなければならない。相撲の歴史は古く、エジプト、バビロニアで行われた相撲も裸体にまわしをつけたものであった事が、遺物の絵や青銅人形から知られている¹⁾。わが国でも、「古事記」「日本書紀」に神話伝説として記述が残っている。

史実としての始まりは、日本書紀に記録される、皇極天皇元年(642)に百済の使者をもてなすため、宮廷の兵士を集めてとらせた相撲である。

(2) 相撲節会時代

天平6年(734)から奈良の都で節会相撲せちえのすまいが行われるようになり、聖武天皇は宿禰すくねの古事にちなんで毎年7月7日に七夕の余興として天覧相撲を行った。図1は平安時代に行われた相撲節会の図である。平安末期になると源平の合戦等に巻きこまれ、承安4年(1174)を最後に節会相撲は終わりをとげた。

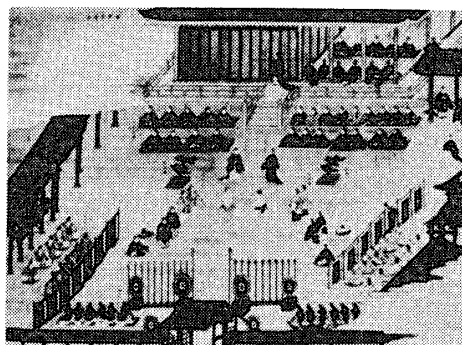


図1 平安朝相撲節会の図

(3) 武家相撲時代

武家時代に移ると、武士達は心身の鍛練、戦闘訓練のために相撲はますます盛んになった。ところが、社会の安定とともに他の娯楽が流行し、一時期忘れ去られるのである。しかし、南北朝の頃から浪人武士が各地の大名のもとに集まって対抗相撲も行われ、戦国時代には織田信長の上覧相撲等、諸大名によって相撲が奨励されるようになる。

(4) 勸進相撲時代

江戸時代に入ると、社会も安定し、浪人者を中心とした職業相撲が盛んになってくる。また、京都、大阪を中心に勸進相撲が行われるようになる。図2は、元禄年間、京都加茂神社境内における、初期の勸進相撲である。

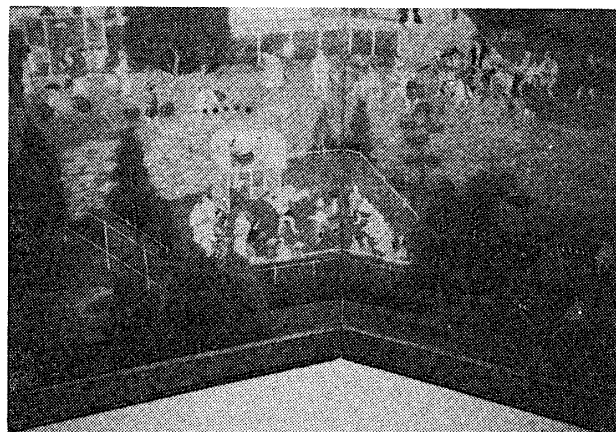


図2 京都賀茂神社勸進相撲の図

江戸後期には、次第に本来の目的からはずれて営利興行化され、大名間で力士をかかえる事が流行した。

江戸でも強豪力士が揃い、相撲の中心が江戸へと移っていく。

(5) 近代

明治維新後は、廃藩置県によって経済基盤を失い、西欧化の中で排撃を受け、苦しい時代であった。しかし、明治42年(1909)に両国国技館が常設相撲場として設けられ、角聖といわれる常陸山が活躍した頃は人気を回復した。明治末期に風俗や規則が確立され、今日でもそれが変化なく続いている。昭和29年(1954)秋場所に蔵前国技館が開設され、現在に至っているが、昭和59年(1984)秋場所でいよいよ蔵前に別れを告げ、両国に移転する。古代の神事相撲が初秋に行われた事からも考えると、ともに秋が選ばれたのは偶然ではないように思われる。30年間続いた蔵前での歴史も一つの幕を閉じ、哀愁を感じず、次の興行場所ではまた新たな歴史がつくられていくであろう。

こうして相撲の様式が長い歴史の中で確立され、国技として現代のスポーツ界においても花形として人気を得ている。相撲の一番一番には、まわし一本をしめ、仕切りによって相手とらみ合い、闘志を内に抑える緊張感と、体ごとぶつかり合う激しさがある。この静と動の中に、心と体と技の調和があり、日本人の文化が息づいているのである。

以上のような伝統を持つ角界の力士まわしが、晴着としてどう推移していったか、次に述べる事にする。

2. 相撲のまわし

(1) まわし(締込み)の系譜

力士が相撲をとる時にしめる特別の禪で、正式には十枚目以上の関取りが用いるのを「締込み」、幕下以下の力士がつけるのを「まわし」という。まわしは、腰に幾重にもまわす事からこの名があり、締込みはぎゅっと力をこめてしめあげるため、締込みという。

1) 歴史

① 平安時代

平安時代の相撲節会には、白い麻布の犢鼻禪すまいが用いられた。図3は狩野養信画の平安朝相撲びと人の図である。これをみると、紐に括った布を前へまわして腰ひもを通し、また後へまわして結んでいる。前は布を広げるので広く、後は結ぶためにまるめるので細くなっている。

② 武家時代

武家時代には、白と茜に染めた麻が用いられ、その上に馬の手綱を巻いた。茜は魔除けの意味も含まれている。平服や狩衣等、当時の服装のままとられる事もあった。

③ 江戸時代

江戸時代になると、安永の頃から勧進相撲に孺子(正絹)の締込みが用いられるようになった。力士も職業となり、見物人を意識するようになったためである。また、20 cm 位前垂れを垂らして装飾性も加えられ、これで局部をおおっていた。前垂れは横糸を抜いたもので、のちにまわしのさがり、化粧まわしのばれんに変化する。現代のようにまわしと分離したのは、明治の頃からである(さがりについては後述する)。

④ 明治時代

明治になると、形態も現代と同じ形態になる。図4は明治時代末に活躍した横綱常陸山が使用し、後に弟子の栃木山に贈られた締込みである。紺地の正絹で、四つ折りにして用いられた。

2) 現代のまわし

① 試合用のまわし

- a 構成寸法 幅 80 cm 長さ 10 m (人によって異なる) 重さ約 5 kg
- b 素材 孺子(正絹)
- c 色 昭和 32 年、玉乃海が黄金の締込みを用い、昭和 33 年に若前田がオレンジ色を用いたが、昭和 34 年に紺、紫系統の規則ができた。紫色は昔から勝色または徳の色といわれ、縁起の良い色とされていたためである

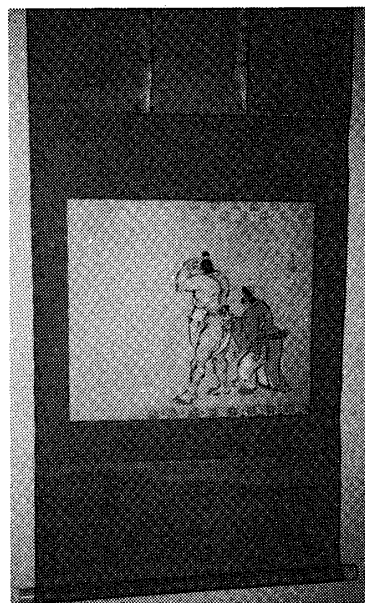


図3 平安朝相撲人の図



図4 常陸山のまわし

る。現在は好みによって自由である。

- d 製造 三越，高島屋等の有名百貨店から専門業者に発注し京都で織られる
- e 価格 約50万円

② けいこまわし

けいこまわしについては，表1に示す通りである。

表1 けいこまわし

階級	構成寸法		素材	色	価格	販売
	幅	長さ				
関取用	50 cm	9 m	木綿の厚地	白	約8,000円	㈱大野屋
幕下以下	50 cm	6 m		黒	約5,000円	

3) 着装方法

化粧まわしの下には，下着として褌をしめるが，試合の時は直接つける。

図5-aのように，布幅を四つ折りにして，一端を開いて股間に通す。次に図5-bのように，二回腰にまわし，先端を前に垂らして更に一，二回まわして，褌の間にはさみ込む。後は，図5-cのよう一方の端を背後の立褌にひっかけ，T字型に結ぶ。

腰に強くくいこむようにしっかりしめる事が必要で，熟練を要する。力士の正装はこのまわし一つであるため，これをいい加減にしめる事は，既に心にゆるみが生じている証拠であろう。

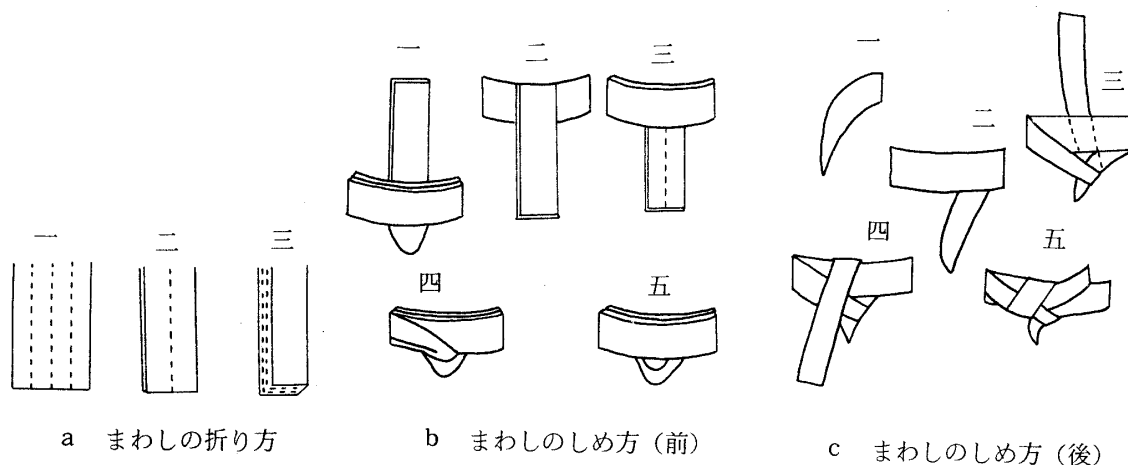


図5 まわしのしめ方

4) まわしを着する意味

まわしは，陰部を隠し，これを保護する意味も勿論あるが，本来の褌の呪性や，動きの最も少ない部位につける，という機能性をそのまま受け継いでいる。また，大きな腹部を支える腹帯のような役割もしている。下腹にしめる締込みは，「褌をしめてかかる」という言葉通り，試合前の気持ちをいっそう引きしめる事であろう。

褌には，一本式のものとは二本式のものがあるが，二本式のものには美的要素もあり，実用的で用布も少なく経済的，一本式のものには機能性を重視しており，用布も多いので，贅沢と相反する性質を持っている。

平安朝相撲人の図(図3)をみると、二本式のものをしての対し、現代の力士のまわしは一本禪で、絹布をふんだんに使った最高に贅沢なものである。平安時代は相撲人が特別の職業ではなかったので、節約型の二本式のものを使用されていたのであろう。しかし、現代のように相撲が国技として確立され、まわしが力士にとって唯一の晴着となると、極めて高価な贅を尽くしたものとなる。——贅を尽くすといっても、勝つ事が一番要求されるのであるから、試合の時に飾りをつけるわけにはいかない——そこで、素材や織り方に最高のものを用いて格をつけ、しめ方も最も活動的で無駄を省いた一本禪の形態となったのである。そして、デモンストレーション用として、次に述べる化粧まわしが分離するのである。

この化粧まわしの前布は、二本禪の装飾性を真似た顕著なものである。

(2) 化粧まわしの系譜

1) 歴史

潔装禪(きれいに装う禪)と書く、といわれている。

土俵入りがいつ頃から始まったか、はっきりしていないが、元禄時代には既に行われていたようである。その頃は、試合用の取りまわしと土俵入りの化粧まわしは同一のものであった。最初の頃は絹、緞子に切付紋を縫いつけただけのものであったが、次第に織物や染物に花鳥等を金糸、銀糸で刺繍した、豪華なものとなった。



a 鼠ヶ関岡右エ門(江戸時代)



b 戸田川鷺之助(江戸時代)

図6 力士の化粧まわし

図6-aは、化粧まわしと取りまわしの区別がなかった頃のもので、現存する力士まわしとして、最古のものである。寛保から宝暦(1741~1763)ころの鼠ヶ関岡右エ門のもので、朱色の地紋様の緞子で、先端に二本の細い金糸が入っている。まだ刺繍等の装飾はされていない。

土俵入りの化粧まわしが作られるようになったのは、宝暦末頃からである。取りまわしの装飾が華美になってくると試合にも支障をきたし、事故の原因ともなるからである。この頃の化粧まわしはまだ膝丈位で、安永の頃から足首位の長さになる。

図6-bは、土俵入りの化粧まわしとして現存する最古のもので、明和から安永(1765~1773)に活躍した、戸田川鷺之助が使用した。退紅色の緞子地に、蝶と牡丹が金糸でみごとに刺繍されている。下に横糸を抜いた房——後にばれんとなる——がついている。この頃のものは丈

も長く、派手であったが、寛政元年(1799)に幕府奢侈禁止令が出てからは、抱え藩の印紋を入れるだけの地味なものとなった。

色は、禁色といって、紫は最高位の横綱以外は使用できなかった。紫を高貴な色とするのは、故実に習っている。

化粧まわしが懸賞として贈られるようになったのも、江戸時代からである。

明治にはいると、華美なものが復活し、印紋にかわって定紋が入るようになった。明治の初期ころは、前垂れの部分に絹房を垂らすのが流行した。

素材は、ゴロウ地(アカスリ等に使う)、ラジャ地、ビロード等の輸入品が用いられた。

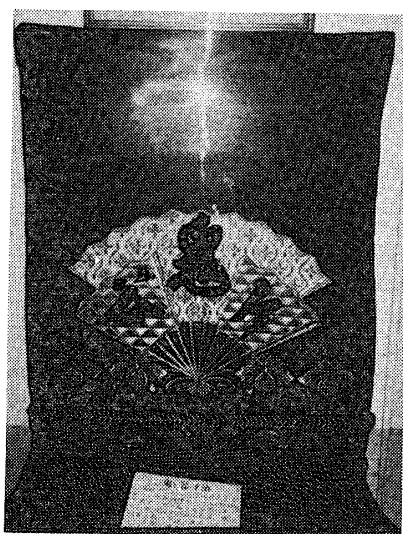


図7 鬼ヶ谷の化粧まわし(明治中期)

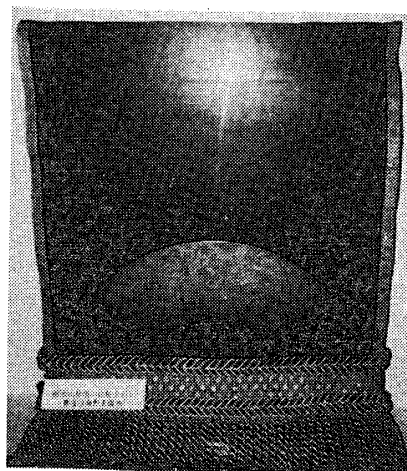


図8 栃木山の化粧まわし(昭和初期)

図7は明治中期の鬼ヶ谷のもので、茶色の地に金糸で扇が刺繍され、金糸をよったばれんもつけられており、現在のもので変わりがない。

図8は昭和14年に引退した、栃木山の化粧まわしで、竜の彫金がつけられている。

2) 現代の化粧まわし

図9は、大乃国の現代の化粧まわしである。これは大乃国の生まれ故郷である北海道の芽室の山々と、裾野に広がるじゃがいも畑やとうもろこし畑の風景を図案化し刺繍したものであるが、後援会の人々が勝利の願いをこめて贈ったものである。

このように化粧まわしは、江戸時代に切付紋を縫いつけた単純なものから次第に花鳥等を金糸、銀糸で刺繍した豪華なものへと移行したが、幕府奢侈禁止令が出てからは抱かえ藩の印紋を入れるだけの地味なものとなった。しかし、明治に入ると再び華美なものが復活して印紋から定紋に変わり、素材も絹、緞子の他にビロード地、ラジャ地等の輸入品も使用されるようになり金糸、銀糸の刺繍も施され現代に引き継がれている。

次に、現代の化粧まわしについての概要を述べる。

- ① 構成寸法 幅 68 cm 長さ 7 m 以上 重さ 4 ~ 5 kg 袷仕立



図9 現代の化粧まわし

- ② 素材 博多織または西陣綴
- ③ 色 地色は自由であるが、ばれんは大関以上は紫(紫は古来から高貴な色とされている)
- ④ 製造 有名百貨店から専門業者に発注し京都で織られる
- ⑤ 刺繍 宮田刺繍舗(東京)
- ⑥ 価格 博多織 40~50万円 西陣綴 60~70万円
- ⑦ デザイン 富士山・桜・日の出が多い
- ⑧ 懸賞 昭和34年から全勝力士に限って贈られる。第一回は、荒岩亀之助のもので、ピロード地に「全勝」の文字が刺繍されている。三井呉服店製作。
- ⑨ ばれん 太さ2.5cm 長さ14cm 本数 約100本 大関以上は紫

化粧まわしは、禪に前布を垂らす事によって装飾性を加えた表着として、最も代表的なものである。また、ばれんをつける事は、さがりと同じ意味で、悪霊を防ぐ意味でもある。つまり二重、三重に悪霊から身を守っているのである。

このように前ばかりを守っているかという点、そうではなく背後では、きりっとしめ上げた結び目によって守られているのである。この事については次の横綱のところで詳述する。

3. 横綱の系譜

(1) 歴史

江戸時代には力士の最高位は大関で、横綱は強豪大関にのみ与えられる称号であった。

図10は江戸時代、谷風の使用した横綱である。重さ約2kg、太さ5cmである。このように、江戸末期までは細かったが、昭和に入ってから現在のような大きさになった。

明治42年(1909)6月から、力士の最高位として横綱が設けられた。また、番付に初めて横綱がのったのは、明治23年(1890)の西ノ海からである。

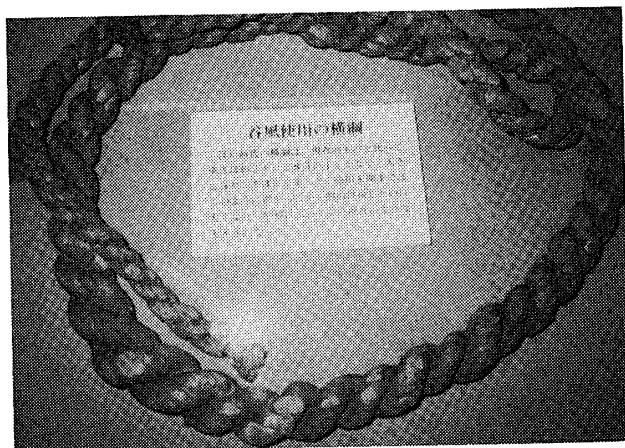


図10 谷風の横綱(江戸時代)

(2) 種類

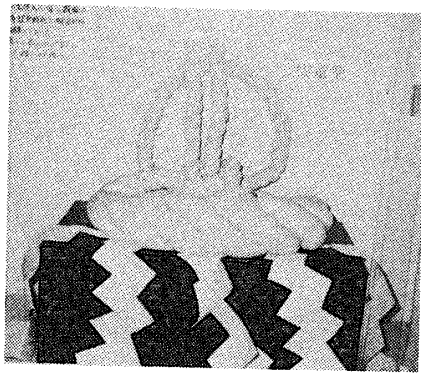
江戸時代から明治の初期までは片輪結びであったが、中期頃から一つ輪、二つ輪とまちまちであった。結び方には、図11-aの雲竜型と、図11-bの不知火型がある。

雲竜型は一つ輪結びで、10代横綱の雲竜(文久~元治)の土俵入りからこの名があるが、実際には20代横綱梅ヶ谷、明治36年(1903)の型が残っている。

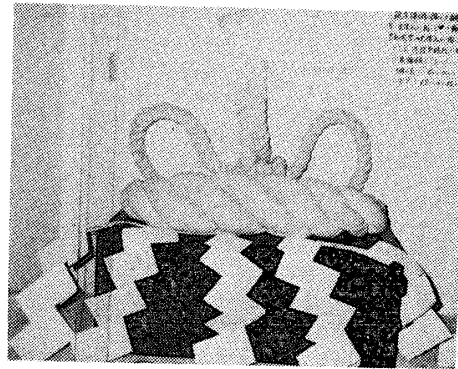
不知火型は二つ輪結びで、11代横綱不知火、文久3年(1863)の土俵入りからこの名があるが、現在のものは22代横綱太刀山が明治44年(1911)に作り出したものである。

ここで、結びの事についてふれたいと思う。結びは物を結合させる実用的手段として大切なものであるが、わが国では精神的な部分も重要視されてきた。即ち、結びに対する信仰である。

「古事記」には、「むすび」の名がついている神が多く、当時の人々がいかに神秘と崇敬の念を抱いていたかをうかがう事ができる。結びとは、神聖な魂を結び込める、呪力を持ったものだったのである。力士にとっては、勝利を祈る気持ちもこめられるのであろう。背後の大きな



a 雲竜型



b 不知火型

図11 横綱の種類

結び目は、悪霊を威圧する重要な役割を果たす。

また、結は同じ血族集団を意味し、結び目を見ただけでどこの集団かわかる紋章の役割も果たしていた。横綱もその結び目によって、雲竜型と不知火型の区別をしているのである。

日本では、しめ縄は神前または神聖な区域にかけ渡し、不浄に触れないようにするものである。横綱も土俵入りをして地鎮祭を行うので、清浄を保つためにつけられる。また、悪霊や邪気の侵入を防ぐという意味も含まれる。勿論、「横綱」という最高位を誇示するための飾りでもある。

綱は定式によって左よりで、三筋を組合せ、紙四手(御幣)を5本下げている。江戸時代には引き上げ四手であったが、今は図11からもわかるように、四垂れの幣である。これも、邪気払いの一つの呪具で、悪霊が人間の下腹を狙って侵入しようとしても、前面に同じような隙間がいくつもあるため、どこから入っていか迷っているうちに、疲れて侵入をあきらめるといふものである。そのために、1本1本が全く同じでなければならないのである。この事は、次に述べるさがりも同様である。

(3) 現代の横綱

- ① 構成寸法 長さ4.5～5 m 重さ13～15 kg
- ② 素材(材料) 麻5 kg キャラコ6反 銅線10 m
- ③ 色 白
- ④ 価格 10万円以上(協会から綱代として、一場所毎に15万円支給される)
- ⑤ 四手 5本
- ⑥ 製造 綱打ち式、綱より式、綱打ち祝(横綱始練式)、また大正時代には編縄式ともいわれた。新横綱誕生の時や、東京場所毎に作られる。昔は神聖なものであるため、力の秀れた者が精進潔斎の上作ったが、現在は部屋の力士が総がかりで行う。

横綱も、試合の時につけるさがりも、衣の原点である紐衣の呪術性、装飾性を顕著にし、現代に連綿と受け継いでいるのである。

以上のように、横綱の衣装は、前述した化粧まわし、横綱、四手によって前面を、綱や化粧まわしの結び目によって後面を幾重にも守っている。と同時に、その力と地位を外に示すための最たる衣裳である。これらを身につけて土俵入りする横綱達は、堂々とした風格と気品に満ちあふれている。

4. さがり(ばれん)の系譜

(1) 歴史

江戸から明治時代にかけては、締込みの先端の横糸を抜いてほぐし、のりで固めて20 cm位垂らしていた。しかし、試合中に手がからんで危険なため、明治中期頃から、現代のような取りはずしのできるものになった(図12)。

名称は、前垂れ、ばれん、まわし等であったが、明治末期から「さがり」というようになった。

(2) 現代のさがり

- ① 構成寸法 長さ40 cm位 幅 人によって異なる
- ② 本数 幕下以下 13本
関取り17本(大きい人は19本) 祝儀
に用いる数の縁起から、奇数に限られる。

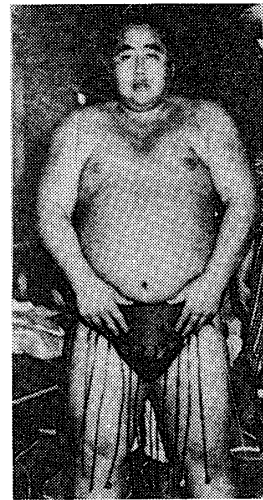


図12 さがり

さがりは、相撲道の礼儀作法から、儀礼的に陰部を隠すのであるが、横綱の四手と同じ意味を持つ。機能性を最も重視したまわしに、魔除けとしてのさがりが残っている事は、日本人がいかに関を神聖なものと考え、また霊を信じているかを改めて知る事ができる。

要 約

禪は本来表着であり、それを仕事着として受け継いでいるのが力士のまわしである。

相撲の歴史は古く、わが国でも「古事記」等に記述が残っている。奈良・平安時代には天皇による節会相撲が行われ、武家時代は武士の心身の鍛練のために盛んであった。江戸時代には力士が職業となり、勸進相撲が行われ、明治末期に風俗や規則が確立されて今日に至っている。

初期のまわしは、まわしと化粧まわしの区別がなく、平安時代には白い麻の犢鼻禪、武家時代は白と茜の麻であったが、江戸時代に力士が職業となると、素材として最高の絹が用いられるようになる。そして、デモンストレーション用として豪華な化粧まわしが分離するのである。

また、紐衣の呪性も残され、特に横綱の衣装は前面を化粧まわしや横綱、四手等によって、後面は魂を結びこめた綱や化粧まわしの結びによって、幾重にも悪霊から身を守っている。一方、それはまた、力と地位を示すための最高の飾りでもある。

以上のように、力士のまわしは形こそシンプルではあるが、紐衣の呪術性、禪の装飾性と機能性、結びの魂等、さまざまな要素が集約された最小にして最高の衣である。

最後に、本研究にあたり貴重な資料の写真撮影をさせて頂き、また懇切な御助言を頂きました相撲博物館の方々および、力士の方々に深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 服装文化協会：服装大百科事典 上, 522~523, 文化出版局(1981)
- 2) 秀の山勝一：被服文化, 37, 16~20, 文化出版局(1956)
- 3) 深作光貞：「衣」の文化人類学, 95~107, PHP 研究所(1983)
- 4) 額田巖：結び, 176~194, 法政大学出版局(1976)
- 5) NHK サービスセンター：大相撲特集号・春場所, NHK(1984)
- 6) 出羽海智敬：青少年の相撲指導要綱, 日本相撲協会指導普及部(1982)